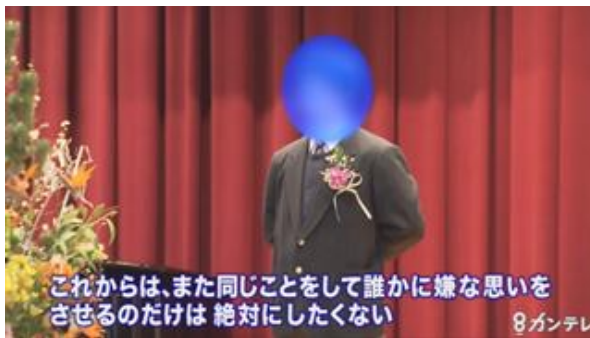


大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2850 号 2016.2.6 発行

少年院で迎える成人式 20歳の誓いの言葉は... カンテレワンダー 2016年2月4日  
 刑罰を受ける「少年刑務所」ではなく、罪を繰り返さないための教育を受けながら社会復帰を目指す「少年院」。その少年院で矯正の日々を過ごしながらか成人を迎えた若者取材



しました。

大人への仲間入りを果たした新成人たち。祝福を受けた場所は、塀の中でした。

【ユキオさん（20歳・仮名）】「これからは同じことをして誰かをいやな目にさせるのは絶対にしたくない」

更生を誓う、20歳の門出です。

【教官】「起床！」

午前6時45分。浪速少年院の一日が始まります。

【院生】「イチ、ニ、サン、シ、ゴ...」

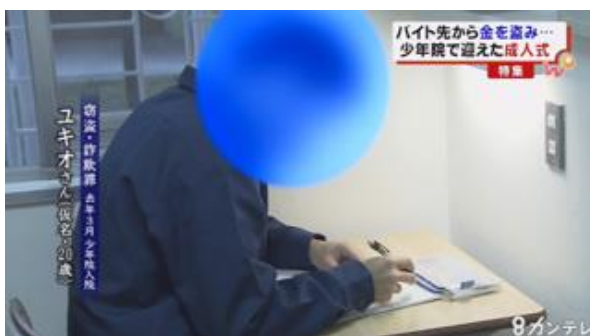
ここでは、窃盗や傷害などの罪を犯し保護処分となった16歳からおおむね20歳までの男子およそ100人が、社会復帰を目指し、矯正教育を受けています。

少年たちは20人ほどずつ、5つの寮に分かれて生活しています。収容期間はほぼ1年です。個室が設けられたこの寮には、少年院を出る時期が近づいた者が集められています。

20歳のユキオさん（仮名）。アルバイト先から金を盗みました。原因は、パチンコでした。

【ユキオさん】「(パチンコに) 興味本位から毎日行くようになって、金が尽きて。バレないだろうと盗ったのが始まりでした。

(少年院に来て) 最初は本当に凄く辛かったです、入った時は。いっそ死にたいとまで思った」



浪速少年院では、教育の柱に「職業訓練」を置いています。溶接や板金、木工などの技術指導が行われ、様々な資格を取ることもできます。

ユキオさんは電気工事科で、電気工事士の免許を取りました。高校を中退したユキオさんにとって、大きな自信にもなりました。

少年院では月に2～3回、個別の面接が行われています。教官は、時間をかけて少年た

ちの心の内にあるものを引き出していきます。



思い詰めてしまったことに一因があると考えていました。

【教官】「自己嫌悪なんでしょうね。もう自分が嫌で嫌で仕方なくて。「こんな自分でもええんやな」とちょっとずつ思えるようになってきたのが大きな変化なのかな」



うんでね。新しいスタート切れるようにカンパイ！」

‘仕事納め’のこの日。年に一度のすき焼きです。

正月三が日が明けるまで、訓練や授業は休みに入ります。少年院では、普段は私語は禁じられていますが、このときだけは特別です。

【教官】「なんで不登校？」

【ユキオさん】「面倒臭かったんですよ、イジメとか」

ユキオさんは少年院に入る前、引きこもりに近い生活を送っていました。

【ユキオさん】「全く知らんところに足を踏み入れるのが怖い、自分は。他の人に頼ってしまうというか、頼らないとそういうところに足を踏み入れられない」

【教官】「頼るのもアリなんじゃない？『僕は駄目なんだ』と、『何が駄目なんだ』ということの後押しされないと怖いんですよ。じゃあ駄目じゃないところ探したらいいんじゃない？」

【ユキオさん】「僕がだめなんじゃない...」

【教官】「いいとこ探してみたいなのをいっばいしたら」

教官は、ユキオさんが犯罪に走ったのは、人とコミュニケーションが取れず、

毎日、夕食後。

【院生】「集会始めます！礼！お願いします！」

寮ごとに色々なテーマで討論する「集会」が開かれます。この日は、「被害者にどのように償うか」について話し合われました。

【ユキオさん】「まず手紙を出そうかな、と。「会いたいです」という内容で送って」

【院生】「手紙自体、相手が嫌かもしれないし、返信来なくてモンモンするのも嫌やし」

【ユキオさん】「やっぱり送らんと分からんから、何もしないよりは手紙を送って、一歩、二歩、動いてみるのも大事かと思っているんですけど」

人と関わるのが苦手だったユキオさん。相手の意見に耳を傾け、自分の考えも主張できるようになりました。

【教官】「ことし一年、皆、反省したと思

【院生】「ムッチャうまい！」「一年ぶりに食べた」

【ユキオさん】「ああうまい」

少年たちに若者らしい笑顔が戻りました。

1月。一般の成人式より少し遅れて、浪速少年院で、成人式が行われました。

式に臨む新成人は16人。その中に、ユキオさんの姿もありました。

新成人たちは、一人ずつ舞台上上がり、決意を述べます。

【ユキオさん】「回りから金品を盗み、迷惑をかけたことが、自分の負い目になっています」

出席しない保護者もありますが、ユキオさんの母親は祖母と一緒に来てくれました。

【ユキオさん】「まずは身近にいる親に迷惑かけた分、尽くしていきます」

式の後、新成人たちには、特別に保護者と面会する時間が設けられました。

【母親】「人生スムーズに道が真っ直ぐならいいで。そうじゃないで。壁もあったり色んなことあるで」

【祖母】「山もあるし谷もある」

【母親】「どん底っていうのもある」

【ユキオさん】「今どん底だから。自分にとっては」

【母親】「どん底だったら這い上がったらいい、なにくそって這い上がったら大人になるさ」

【母親】「ちょっとは進歩したかな。ハキハキと物を言う。自分の考えを持って、このを見せてくれたらそれでいい」

【ユキオさん】「(出院したら) 悩みとかも言っていけるような友達も作りたいし、いろんな人と接していきたいという気持ちは凄くあります。早く誰かのために手を差し伸べられるような大人になりたいと思っています」

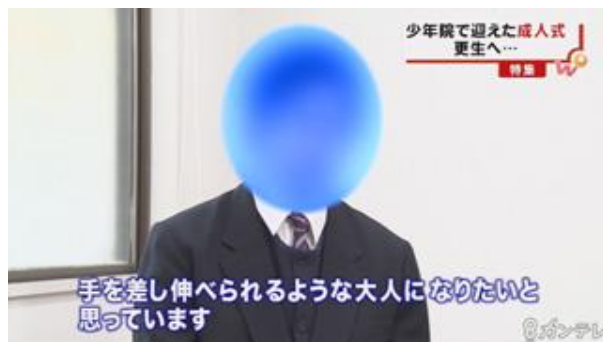
ユキオさんは、大学に進学するという目標を決めました。

順調にいけば春までにはここを出て、

再び社会の中で歩み始めます。



きて。(自分に対しては) 何もしてもらわんでいいけど、人に迷惑かけず生きてるよ、っていうのを見せてくれたらそれでいい」



## <水曜フォーカス> 8. LGBTと学校

カンテレワンダー 2016年2月3日

倉橋優奈さん(43)は、あえて女子高生の制服を着て、講演に臨みました。

男性として生まれ、今は女性として生きています。

【倉橋優奈さん】「倉橋優奈って言います。優奈って本名。戸籍上も優奈って今





は出るようになってます」

私にとって学校は、決して居心地のいい場所ではありませんでした。だからこそ、目の前の生徒たちに、同じ制服を着て同じ社会で生きている“私たち”の存在を知ってほしいのです。

【倉橋さん】「学校生活はなかなか...、結構、陰であれこれ言われたりとか...」

LGBT（「レズビアン」「ゲイ」「バイセクシャル」「トランスジェンダー」）など、性的マイノリティーが人生の序盤で直面する大きな壁...

『性的マイノリティーの学校生活』にフォーカス。

去年、全国のおよそ7万人を対象に行われた調査によると、「性的マイノリティー」の人は全体の7.6%。13人に1人の割合でいることがわかりました。

そうした人の多くが、小学校の入学前から中学校にかけて自分の性に違和感を抱き始めると言われていますが、学校は、「性的マイノリティーが存在すること」を前提とした場所ではありません。

先月開かれたLGBT成人式。大人になった今、学校生活を振り返ってもらおうと...

【参加者】「スカートも履きたくなかった」

「言動の端々...、「男子はこうするよな」っていう言葉だったりとか」

「トイレとか身体測定が...。（先生に）「女の子やのに」みたいなことを言われたりすることはあるんで。自分が（性別に違和感があることを）言っていないんでしょがないと思うんですけど」

「自分が女性で女性を好きっていうことも異常なんちゃうかなって...。学校で何かしら教えてくれてたらそういう人もいて、自分そうかもしれへんっていう、ちょっとした糸口が見つけられたかもしれないですけど...」

悩みや迷いを、打ち明けられないことが多い学校生活。

性的マイノリティーは自己肯定感が低く、性同一性障害の人は半数以上が自殺を考えたことがあるという深刻なデータもあります。

<倉橋優奈さん・高校時代の手記>

「偏見や非難、辛い思いをするために学校に行っているのではないか」

「もうこんな人生うんざり」

「生きることから逃げ出したい」

こうした状況に危機感を抱いた文部科学省は去年4月、性的マイノリティーと呼ばれる児童・生徒の相談体制を充実させるよう、全国の小中学校に通知を出しました。

大阪では、教員たちが集まって勉強会を開き、学校で当たり前に行われている“男女分け”の意味から見つめ直しています。

【小学校の教員】「パソコン室に行ったら、赤と青のスリッパになってて。男



子こっち、女子こっちみたいなの」

【小学校の教員】「“さん付け”ひとつにしたって、なかなか全員でやりましょうっていうところになかなかいかない」

【小学校の教員】「日本社会の中ではこれが当然みたいになってることがいっぱいあって、「そこは当たり前じゃない」っていうのを私たちが学んで変わっていかなければ...」

一方で、こんな声も。

【小学校の教員】「学校って当事者がいなかったら進まなくて。これがあるかもしれないからこうしようってなかなかかなりにくいですよ」

だからこそ私は、当事者として学校で講演をすることにしました。

【倉橋さん】「保育園、幼稚園と上がっていくごとに、“一般的な男の子”と様子が違うってことに親が気付かだして。幼稚園継続...途中で中退した感じで、「もう行かなくていいわ」と言われた

親は、私が“男らしくない”ことを恥じていました。家の外に出ることすら許されず、学校に通えないまま大人になりました。

【倉橋さん】「私としては中身が欲しかった。みんなが（学校で）過ごしてきた時間を、どんなものかって自分の目で確かめたかったんですよ」

そして6年前、37歳の時。私は女性として、高校に入学することを決意したのです。

入学後、多目的トイレや教員用の更衣室を使わせて欲しいと学校に相談し、受け入れてもらいました。

しかし、他の生徒からは好奇の目で見られ、どう接したらいいのか分からず、優奈さんはひとりぼっちでした。

【倉橋さん】「これぐらいの規模で会うのって、1年半ぶりかそれぐらいなんです」

【友人】「優奈！お～久々」

きっかけをくれたのは、高校2年のときに会ったクラスメイトです。

【友人たちとの会話】「優奈、優奈、見て。覚えてる？マラソン大会。優奈走ったやん、全部。めっちゃ覚えてるわ」

「先ゴールしたけどみんな優奈のこと迎えにいった」

「そうそう先ゴールしたけど、わざわざ迎えにいった」

「何、この感動な感じ～」

一時は不登校になるほど苦しんでいた優奈さんがクラスメイトと打ち解けられた理由とは...



【友人】「年齢やったり、自分の生き立ちとか、親のこととか、今までしてきたこととか言うようになって、優奈も打ち解けてたっていうか...

「心開いてくれたな」

「人を選んで心開いてたっていうか」

優奈さんが、意を決して自分の境遇を打ち明けたこと。仲間たちが思いを受け止めてくれなければ、優奈さんの学校生活は全く違うものになっていました。

だから私は、“私たち”のことを知って欲しいのです。

【倉橋さん】「女性は女性でもいろんな個性があるし、男性は男性でもいろんな個性があるし、男性だからこうじゃないといけないとか、女性だからこうじゃないといけないっていう決まった答えなんてないと思うんですよ」

男性として生まれ、女性として生きている“私”。彼女のメッセージは、先生たちに向けられていました。見えてきたのは...先生へのメッセージ。学校は、子どもたちだけでは変えられません。

【高校の教員】「今までそこまで、配慮をしなくてはいけないっていう感覚は無かったんですけど、潜在的にそういう数字上はそういう生徒がいるっていう事実があると思いますので、それをその子らが我慢しているのか、私らが気付いてあげられるのか、その差はすごい大きいと思う。それを先生が持っているか持っていないかで生徒の人生は大きく変わってくるので、責任は大きいと思います」

【倉橋優奈さん】「難しいとは思いますが...、ただ（性的マイノリティーが）「いる」ってことだけは、念頭に置いて欲しいな」

それが私の思いです。



## ジカ熱予防 蚊を不妊化

中日新聞 2016年2月4日

【ウィーン=共同】中南米などでのジカ熱流行を受け、国際原子力機関（IAEA）は2日、ジカウイルスを媒介する蚊の繁殖を抑えるため、加盟国の要請に応じ、放射線を用いた蚊の不妊化技術の移転事業を本格化させることを明らかにした。リオデジャネイロ五輪を控えるブラジルなどから既に技術移転の要請があった。殺虫剤や遺伝子組み換えによる駆除技術では害虫が耐性を持ち、効力が失われるほか、環境に悪影響を与える可能性もある。IAEAは、放射線照射による不妊化は耐性の問題がなく「人間や環境に最も安全な技術」とアピールした。ジカ熱は予防薬や特効薬がない。感染者が最も多いブラジルでは、妊婦のジカ熱感染との関連が指摘される新生児の小頭症が急増している。

IAEAは蚊のさなぎに放射線を照射し不妊化する技術の開発を促進。不妊化した雄を大量に放し、野生の雌と交尾させることで、卵をふ化させず個体数を減少させる。イタリアや中国の実験で大きな成果を挙げた。通常の雄の蚊1匹に対し、不妊化の雄10～20匹を放す必要があるため、殺虫剤の使用や蚊の捕獲など他の方法との併用が想定されている。同じ技術は果実の害虫であるミバエ類の駆除で成功を収めている。

## 残った薬 訪問調査 岐阜県

中日新聞 2016年2月5日

岐阜県は2016年度、糖尿病やリウマチなど慢性疾患の通院患者宅を薬剤師に訪問してもらい、処方薬の飲み残しを実態調査する。残した量や理由を聞いてむだをなくし、医療費抑制を図る狙い。中部6県（愛知、岐阜、三重、長野、滋賀、福井）では初めての試



みで、16年度当初予算案に費用を盛り込む。

岐阜県は、飲み残しの理由を「日中は仕事で忙しい」「味や形状から飲みにくい」「うっかり忘れた」などと想定。患者が「怒られるかも」「恥ずかしい」などと医師に飲み残しを言い出せず、同じ薬を追加で処方されることが少なくないとみている。

県の調査では、薬局約50カ所が協力し、薬剤師は慢性疾患の患者50～100人の自宅を3カ月間に3回訪ねる。飲み残しを把握した場合は医師に報告するため、次回からの処方量を減らせる。理由によっては、1日3回飲む種類から2回飲む種類に変更したり、粉末から錠剤に変えたりといったことも検討する。

3回の訪問によって飲み残しの量をどの程度減らせるか、成果をまとめた上で県薬剤師会全体で情報を共有する。17年度以降、県内に約1000カ所ある薬局すべてで患者との対話に力を入れ、処方の改善につなげるという。

同様の調査は埼玉県が14年度、150人を対象に実施。3回の訪問調査を行った結果、飲み残しの薬は金額で4割減ったという。



#### 論説：増える「ニセ電話詐欺」 お金みの話には用心を 佐賀新聞 2016年02月06日

刑法犯の認知件数は減る中で、オレオレ詐欺や架空請求詐欺など振り込め詐欺が増加している。昨年1年間の県内の被害額は初めて2億円を超えた。ほぼ全てのケースで電話が使われており、県警は「ニセ電話詐欺」と呼び方を統一して注意を呼び掛けている。

「おれだよ、おれ」と息子や孫になりすまし、交通事故や株取引の失敗、女性関係でトラブルなどを起こしたと言ってお金を無心する詐欺は、2003年ごろから頻発した。そんな手口にだまされるとはと誰もが驚いたが、十数年たっても被害は減らない。

最近も連日のように現金を要求する電話が掛かっている。一度、「風邪をひいた。明日電話する」と言って掛け直す手口が目立つ。現金を振り込ませるのではなく、他県まで持って来させる「上京型」もある。直接手渡すなら安心という心理につけ込んだ手口だ。

佐賀市の女性はニセ電話を受けて岡山県までおびき出されそうになったが、現金を準備して佐賀駅まで来たところで、おかしいと思って息子に連絡を取ったことから被害を逃れた。本人の確認が取れるまで行動しないことが防止につながる。

家族になりすますケースにとどまらない。有料サイトの利用や就職あっせん、医療費還付などにかこつけてメールで要求してくる手口もある。現金を宅配便で送らせたり、コンビニで販売されている電子マネーで支払わせるなど、さまざまな方法がある。

だまされないためには、お金にからむ電話は「ニセもの」としっかり心に刻んでおくことだ。

県警は詐欺のターゲットにされている高齢者層を中心に注意を呼び掛けてきたが、防止は困難を極めている。県内の被害額は3年連続で1億円を超え、昨年にはついに2億円に達した。

ニセ電話詐欺という呼称にしたのは、これまでの「特殊詐欺」に比べて分かりやすく、注意を促すには効果的との判断からという。オレオレ詐欺以外の手口でも、必ずどこかで電話が使われている。「お金に関係した電話は危ない」という意識が広がれば防止につながりそうだ。

被害者の半数は高齢者で、そのうち6～7割を女性が占めている。老人会などに加わっていないなかったり、地域とのつながりが薄い人たちが被害に遭いやすい傾向がみられるという。世の中の動きに関心を持ち、詐欺被害が人ごとと思わないように心掛けたい。

オレオレ詐欺は「なんとか子どもを助けたい」と思う親の情愛につけ込んだ犯罪である。

日ごろから家族内で注意し合って、もしもの時に使う合言葉を決めておけば、「おれだよ、おれ」は通用しなくなる。

実際にニセ電話を受けた場合、冷静に対応するのはなかなか難しいという。自分の判断力を過信せず、常に留守番電話にしておくなどで、すぐ取らないようにしておくことが有効になる。犯人と電話で話さなければ巻き込まれない。

被害者は自分の非を責める傾向があり、精神的な打撃も大きい。県警生活安全企画課は「魂の殺人と呼ぶべき犯罪」としている。しっかり対策を立てて臨めばきっとなくせる。佐賀ではニセ電話が通用しないような状況を県民挙げてつくり出したい。(宇都宮忠)

### 社説：新型交付金 新たな勝ち負け生むのか 西日本新聞 2016年02月06日

国会で審議中の2016年度政府予算案には、地方自治体に配分する新型交付金1千億円が計上されている。地方創生の中核予算という位置づけだ。

自治体にも同額の拠出を求め、全体で2千億円規模の事業を展開する。新型とはどういう意味か。しばしば比較されるのが、1988～89年にかけて竹下登内閣が交付した「ふるさと創生資金」だ。

地方交付税不交付団体を除く全市町村に一律1億円が交付され、ばらまきと批判されたが、今回は一律ではない。3月末までに都道府県と市区町村がまとめる地方版総合戦略によって配分される。

まち・ひと・しごと創生法では努力義務にすぎない総合戦略作りに全国の自治体が躍起となり、結果的に甚大な被害を受けた茨城県常総市など特別の事情を抱える3市区を除く全自治体が策定に動いたのも交付金に直結するからだ。

交付額も差がつく。ゼロの自治体もあり得るといふ。元宮城県知事の浅野史郎神奈川大教授（地方自治論）は「金額の多寡で新たな勝ち組と負け組が生まれる。交付金が少ない自治体を政府は消滅させるつもりか」と懸念する。

こうした指摘に、麻生太郎財務相は本紙のインタビューで「地方創生では地方によって確実に差がつく」と答えた。石破茂地方創生担当相も会見などで「努力する地方と努力しない地方に同じ対応をしたら、みんなが沈む」と語る。

努力とは何か。活性化に何の努力もしない地方があるはずはない。総合戦略は近未来の夢だ。その夢を簡単に描けない厳しい現実を抱える地方がたくさんあることがむしろ問題の本質ではないか。

平然と「差がつく」と構える状況ではない。政府は本来、総合戦略作りすら苦勞している地方こそを手厚く支えるべきである。

新型交付金に限らず、地方創生戦略では一段と工夫を凝らしてほしい。どの地方も消滅させないために、そのあり方について国会審議を深める必要がある。決して、地方間に新たな「勝ち負け」を生んではならない。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行